

# 佛教研究

第四卷 第一號

## 如來の名義に就いて

赤 沼 智 善

### 一

智度論第五十五（往三・七九左）に左の文がある。

如來不可得者、或以佛名名爲如來、或以衆生名字名爲如來、如先世來後世亦如是去、是亦名如來亦名如去、如十四置難中說、死後如去者爲有爲無、亦有亦無、亦非有非無。佛名如來者、如定光佛等、行六波羅蜜得成佛道、釋迦文佛亦是來故名如來、如錠光佛等、智知諸法如、從如中來故名如來、釋迦文佛亦是來故名如來、此二種如來中、此間說是佛如來。

この文は大槃涅槃經北本（盈六・六三）南本（盈八・六三）の云何於無量義說無量名、如佛如來、名爲如來、義異名異とあるに對照せしめて考へねばならぬものであらうが、今智度論の文丈けに依つ

て解釋すると如來に二種あり、一は衆生を指して如來と云ひ、二は佛を如來と呼ぶことは明かである。さうしてかの有名な十四置難中の如來死後の存在の問題は佛如來死後存在の問題でなくて、衆生死後の存在の問題と解すべきことも明白である。これは同論七〇(往四・四九)に摩訶般若十四(月四・四)の文を解釋してゐる所でも同様である。

こゝにいふ如來の名義の解釋が、佛教經典の内容研究上可能であるか、どうか、微か自分の所見を述べて、疑義の存する所は大方の諸賢の教示を蒙むりたいと思ふ。

二

先づ如來といふ語が一番初めに用ひられた所を調べて見ると、轉法輪經がそれであると曰はねばならぬと思ふ。もつと精密に云へば轉法輪經を御説きなされる前、五比丘に對して仰せられた語の中に出てゐるのが最初であると曰はねばならないと思ふ。然し轉法輪經の成立に就いては、隨分議論があることと思はれるし、従つてその説法の前、五比丘との會話に就いても、よしんばさういふ光景の舞臺が、釋尊傳道の初めにあつたと許し得とも、現存の大會部所載の記事が、ありの儘の記述かどうかは勿論問題であらうと思ふ。然し乍ら、轉法輪經は最初の説法の記述としては調ひ過ぎてゐると云ふ事以外に、何等後世纔入の迹もなし、従つて現存の轉法輪經に似寄つた形に於いて原

形を髣髴し得ること、思ふ。さうして若しこの假定が許されるならば、轉法輪經（大會部一・六雜阿含V四百四十一頁以下）の中の、「この二邊を離れて、中道が如來に依つて證られた……」いふ如來の語、その轉法輪經を説かれる前の、五比丘に對して、「比丘等よ、如來を名に依つて友の語に依つて呼んではならない。比丘等よ、如來は應供者、正等覺者である」（大會部一ノ六）といふ語とが、釋尊に依つて用ひられた最初の如來の語であると決定し得ること、思ふ。

四分律三二（列五・八右）五比丘見如來坐已皆稱名汝如來、時佛告五比丘言汝等莫稱名汝如來至眞等正覺、如來威神無量最勝……

### 三

世尊は菩提樹下に成道し了つて、七七日解脫の味を味はひ、梵天の勸請に依つて、座を立つて、伽耶の西方ベナレスの鹿野苑に五比丘を求め給うた。若行中給仕の恩義を思ひ、先づ彼等に無上の法を説かんが爲めである。五比丘は珍らしく喬答摩の尋ね來れるを見たが、五比丘の眼中には既に世尊はない、喬答摩に墮落した人である。贅澤な世界に還つた人である。相談して構ひ付けない態度を示さうとしたが、世尊のさどりの威光に打たれて座を立つて迎へた。さうして従前の通り、遊行者の慣習に従つて喬答摩の名と友（*Āyupiso*）の語に依つて呼ぶと、突如世尊の御口から洩れたのが

如來の語であつた。「比丘等よ、如來を名と友と語に依つて呼んではならぬ。如來は應供者、正等覺者である」と。

この意外な叱責は、先づ五比丘の膽を奪うて、傳導上ドラスチックな効果を擧げたに相違ない。理路が整然としてゐる上に佛陀獨爾の敎説である四諦の説法であるとは云ひ、あの簡単な轉法輪經に依つて、憍陳如を初めとし五比丘が順次に證悟の人となつたといふ事は、この思ひ設けない如來を名に依つて呼び、友と呼んではならないといふ叱責が、權威ある者の聲として五比丘の胸に浸み込んだ爲めであらねばならない。然し乍らこの場合、世尊の用ひ給ふた如來の語の意義は何であらうか。「如より來生せるもの」といふ解釋がこの場合あてはまりさうにもない。「先佛の如く來り、先佛の如く涅槃に去る」といふ名義釋も、未だ世尊の胸に相承の意識の出來てゐない今日、適當ではない。世尊はいかなる意味を以てこの Tathāgata を用ひ給ひ、五比丘は如何なる意味に之を解釋したのであらうか。

#### 四

一體の Tathāgata といふ語はその造語からして明了ではない。Tathā + āgata の合成語か Tathā + gata の合成語か、又どちらの合成語にしても、その意味は如何、こう尋ねて來ると、佛陀とか應

供者とか、無上士調御丈夫天人師などと云ふ語の意義明瞭なるに比して頗る明瞭を缺くと曰はねばならぬ。それ丈けに、佛陀其の他の語に就いては左まで多數の解釋にないが、この如來の語に對しては多數の解釋があるのであらうと思はれる。この解釋は、如來の語の意義を知るに勿論缺くべからざる資料ではあるが、大抵は如來といふ語が佛教内にその地歩を占め佛教獨有の意義が成立してから、後の解釋であるからこの解釋を直に如來の語そのものに當てはめることは出来ない。この解釋を參考になしつゝ、如來の原義とその意義の變遷を見て行かねばならない。

先づ *Tathāgata* の語の構成を調べて見ると、*Tathā+gata* とも見れるし、*Tathā+āgata* とも解せられることは前曰つた通りである。*gata* も *āgata* も普通に用ひられる過語分詞であるから、これを *Tathā* に結んで *Tathāgata* に合成せしむる事は何等の問題はないのである。それ故に巴利系の解釋にも如來と解し、如去と解し、梵語系漢譯系でも如來如去兩方の解を取り、西藏でも *de-bshin-nyegs-la* (如去) *de-bshin ljonis-pa* (如來) の義を用ひて居る。誰漢譯系では如來の義に重きを置き、西藏では如去に重きを置くと云ふ相違がある丈けで兩義兼有することは同じである。

斯くの如く兩つの合成語はいづれも可能であるが、然し *Tathāgata* といふ既成の一合成語は實際どの二つの語の合成かといふ問題になると、私は *Tathā+gata* である様に思ふ。それが、少なくとも、今日巴利語と稱せられるマガデイに親しい解釋であらうと思ふ。これには私は二つの方面から

立證することが出来やうと思ふ。

第一には用語の上からである。Tathā gata の様に gata を後詞とする合成語は數多く用ひられて居る。Sammaggata (D. I. p. 55) gatata (D. I. p. 57, Thei G. C. p. 79) vijjagati (Sutta. N. 730), uj'uga'a (J. III. p. 305) Duggata, sugata 等である。Duggata の Sugata は「不幸なる」、「幸福なる」といふ對の形容詞で、この場合の gata は Thana の意味であることは明白である。如來十號の一の Sugata は幸福な人、眞の幸福人の意味であるが、古來の解釋が善逝と解し、龍樹の如きも、「行此二行、得善去、如車有兩輪善去者、如先佛所去處、佛亦如是去」(智度論二二往二・四)と釋してゐるのは餘りに gata の第一義に着し過ぎたものと曰はねばならぬ。

Sutta N. の Vijjagati はその註釋(五〇五頁)に依れば Vijjagati ca ye satā ti ye arahattamaggavijjāya Kil.se vijjhivā gati Khināsavasatti といふ Sammagata の ujjagata といふ aggaḥ alāni arahattam patta tā sammaggaṭṭhāni ujjunī va añṭhaṅgikena maggena nibbānam gatatta ujjaggaṭṭhāni と解釋する (J. III. p. 305) Gatata は Sumangala. p. 168 に gatata ti Koṭipatta citta の説明られて居る。それで gata といふ分詞は patta 達せるといふ意味に解釋せられるのが普通であつて、thana (地位) といふ第二義に轉用せらるゝに到つたものと見るべきであらうと思ふ。

斯ういふ風に gata が後詞として用ひられた合成語が多數あるのであるが、Tathāgata も、この

立證することが出来やうと思ふ。

第一には用語の上からである。Tathā gata の様に gata を後詞とする合成語は數多く用ひられて居る。Sammaggata (D. I. p. 55) gatata (D. I. p. 57, Theri G. C. p. 79) vijjagata (Sutta. N. 730), vj'uga'ta (J. III. p. 305) Duggata, sugata 等々である。Duggata は Sugata なる「不幸なる」、「幸福なる」といふ對の形容詞で、この場合の gata は Thana の意味であることは明白である。如來十號の一の Sugata は幸福な人、眞の幸福人の意味であるが、古來の解釋が善逝と解し、龍樹の如きも、「行此二行、得善去、如車有兩輪善去者、如先佛所去處、佛亦如是去」(智度論二二往二・四)と釋してゐるのは餘りに gata の第一義に着し過ぎたものと曰はねばならぬ。

Sutta N. の Vijjagatā なるの註釋(五〇五頁)に依れば Vijjagatā ca ye sattā ti ye arahatamaggavijjāya Kil.se vijjhittvā gatū Kinnāsavasatti なる解釋がある。Sammaggata は vj'ugata なる arahatān patta tū sammaggatānān vj'juni va aññangikena maggena nibbinān gatatta vj'ugatanān なる解釋がある (J. III. p. 305) Gatatta は Sunangala. p. 168 の gatatta ti Kōṭipatta citta なる説明をして居る。それで gata といふ分詞は patta 達せるといふ意味に解釋せられるのが普通であつて、thana (地位) といふ第二義に轉用せらるゝに到つたものと見るべきであらうと思ふ。

斯ういふ風に gata が後詞として用ひられた合成語が多數あるのであるが、Tathāgata も、この

立證することが出来やうと思ふ。

第一には用語の上からである。Tathā gata の様に gata を後詞とする合成語は數多く用ひられて居る。Sammaggata (D. I. p. 55) gatata (D. I. p. 57, Theri G. C. p. 79) vijagata (Sutta. N. 730), ujuga'a (J. III. p. 305) Duggata, sugata 等がある。Duggata と Sugata は「不幸なる」「幸福なる」といふ對の形容詞で、この場合の gata は Thana の意味であることは明白である。如來十號の一の Sugata は幸福な人、眞の幸福人の意味であるが、古來の解釋が善逝と解し、龍樹の如きも、「行此二行、得善去、如車有兩輪善去者、如先佛所去處、佛亦如是去」(智度論二二往二・四)と釋してゐるのは餘りに gata の第一義に着し過ぎたものと曰はねばならない。

Sutta N. の Vijagatā などの註釋(五〇五頁)に依れば Vijagatā ca ye satā ti ye arahattamaggavijāya Kil.se vijhitvā gati Khināvasatti と解する。Sammaggata と vijagata とは aggati alāni arahattam patia tū sammaggatānāni vijunī va atthangikena maggena nibbānāni gatatta ujagatānāni と解釋する(J. III. p. 305) Gatata と Sammagala. p. 168 の gatatta ti Kotipatta citra と説明されて居る。それで gata といふ分詞は patia 達せるといふ意味に解釋せられるのが普通であつて、thana (地位)といふ第二義に轉用せらるゝに到つたものと見るべきであらうと思ふ。

斯ういふ風に gata が後詞として用ひられた合成語が多數あるのであるが、Tathāgata も、この



一群の合成語と同じく、*gata* を後詞とする合成語と見るが當時の造語用語の慣例に相應するものと思はれる。勿論先きに云ふ様に *āgata* を後詞とする合成語も可能であるから、*Āyain thannō sut-tāgato* とか、*Devānuggahāgata* とか云ふ風に連結してゐる場合もあり、本生譚の註 (III. p. 421) に至つては *Sace koci janissati mayham pi evatūpani bhayain āgacchissatū vancesi idam kha para tañ maranabhayain idāni tachāgatañ ti* といふ風になれり、」といふ意味に用ひてゐるのであるが、然しどちらかと云ふと、古い所では、*āgata* の入つてゐる合成語は *āgata* が前詞になつてゐる様である。

*Āgatāgamo* (A. XI. 18) *Āgataṃ maggo* (Dh. 155 etc.) 等の例であつて、これから見るゝ *Tathā gata* は *Tathā + gata* の合成語と見る方が適當であらうと思ふ。次に意味の上から云ふと、*Tathā* は *Tathatā* 又は *Tathatā* となり得る字であつて、普通に如と譯し得らるゝ文字であるが、先に云ふ様に、如より來生したといふ風に解釋するのは後期のもので、形似上學的な原理的な如といふ様な考は未だ起つて居らない時であるから、*Tathā* は如でないことは申す迄もないことである。それで *Tathā* は *tatharūpo* (斯くの如き) とか、*tathānata* (Thera *gātha* 91 有りの儘に計られる) とか云ふ風に用ひられ、従つてそれと結んで出来る合成語の後詞は *āgata* より *gata* の方が適切であると思はれる。「斯くの如く來れる」といふ意味は、何を豫想して斯くの如くといふか、世尊に相承の意

識が熟して來て、「古來の大聖者」とか、「先佛」とか云ふ事があらはになつて來た時分には、さういふ古來の大聖者の如く來れるとか、先佛の如く來れるとか云ふ意味の解釋も可能であるが、傳導の初期に成道後間のない時分、佛陀にこの相承の意識が明白になつてゐる筈はないから、「斯くの如く來れる」といふ解釋は妥當でなく、從つて *tathā + agata* の合成語は不可能である。さうすれば、斯くの如き狀態のもの、斯くの如く有るものと云ふ *Tathā + gata* の合成語のみが考へ得られるのである。それ故に Childers の辭書でも Monier Williams の梵英辭典でも、ベテルスブルプの辭書でも皆この *Tathā + gata* の合成語と見て解釋してゐるのである。

## 五

扱て斯くの如く *Tathāgata* は *Tathā + gata* の合成語だとすると、その意味はどうなるか、如來の譯語も不可能なれば、如去、如逝の譯語も意味をなさない。……勿論これは語の成立から云ふので、この語の歷史上、生命ある語が發展生長した過程の上で云へば、これらの譯語も皆可能であり、生きて來る譯である。この問題は後で少しく觸れて見たいと思ふ。……さうすると合成語 *Tathāgata* の原始的意義は何であらうか。これは一に *gata* の解釋の如何に依る事で、*gata* の第一義 *gone* を取れば *gone in like manner* といふ様な意味で、餘りはつきりした意義をなさないが、これ

は Sugata, Dugata な<sup>じふ</sup>gata と同じく、gati という名詞を導き出す迄の語で、状態にある、状態になれるという第二義に解すべきであらうと思ふ。それで Tathāgata は One who is in such a state な One who situates in like manner なか<sup>いふ</sup>意味であらうと思ふ。

それで斯くの如く Tathāgata を解釋して見るに Tathāgata それ自身には、本來勝れた人とか覺つた人とかいふ偉人を曰ひ顯はすべき意味はないのである。寧ろ Childers が解してゐる様に有情といふ意味であらうと思はれる。然し有情といふ意味であるにしても、かうして One who goes the way of all flesh なか One who is subject to death という意義から有情といふ意味を盛つてゐるかは私には不明である。これは釋尊以前のクラシックスに昏い私には解し得ない事であつて、先輩の御教示を得たいと思ふ。この様に追ひつめて來て、Tathāgata の語義を考へて來ると、その最も本来的な意義とその用語例を知ることが出来ないが、佛教の原始經典には、衆生の意味と佛如來の意味とに用ひられてゐることを發見するのである。阿含經典に顯はれてゐる Tathāgata の一々の場合を擧げることが繁に堪えないが、その用語例を概括して云ふと、

### 一、衆生と同義の場合

### 二、龍樹の所謂佛如來の場合

とあり、二の中、初めは世尊自身の特有の名稱であつたのが、變遷し生長して、

一、世尊自身に用ひられ、

二、過去の諸佛に用ひられ、

三、心解脱の聖者に用ひられて

來てゐる様である。

それで先づ第一に、衆生と同義に用ひられてゐる場合を挙げると、先きにも出した、十四置難中の *Tathāgata* がそれである。これは世尊の當時、一般の人々に取つて問題であつたもので、修道のために證悟の爲めに何にも利益にならないといふ理由で、世尊が捨置 *Avyākata* せられた十四問題の中の四問題である。即ち(一)、如來は死後存在するか、(二)存在しないか、(三)存在するでもなく存在しないでもないか。(四)存在し同時に存在しないといふ様なものかといふ四問題である。この問題は佛教經典以外のクラシックスに出てゐるかどうか、まだ調べて見ないが、佛教經典には至る所に出てゐるもので、當時一般の人々には餘程普遍的な問題であつた様に思はれる。この問題は決して世尊が如來といふ語を聖者の意味に使はれてから、それに刺戟せられて、證悟者の死後は存在の範疇に入るか入らないかといふ問題ではなくて、それ以前から一般の人々の頭腦を占領してゐた問題であつた事は、阿含經典を通讀するものゝ首肯せねばならぬことと思ふ。さうすれば、世尊の用ひられた如來の語が未だ普遍化しない以前に證悟者としての如來の死後存在の問題が起り得る筈なく、

如來とは一般の有情の換名であつて、その問題は換言すれば、今日の民衆にも共通な靈魂の有無問題であると思ふ。それ故にこの問題を解釋する所に至ると、佛鳴はいつでも、Tathāgata ti satto 註解してゐる。(Sumaṅgala vīṭṭisī III. p. 133 manorathapurāṇi 錫蘭版 p.726. Athasālinī p. 371 satto tathāgato nāma.) 龍樹も亦、智度論二(往一、二一右)等に、

死後有神去後世、無神去後世

と一般に衆生の靈魂滅不滅問題に解してゐる。一番初めに擧げた智度論の文も同様である。(羅什はTathāgataを佛如來の義に解せない時はいつも如去と譯してゐるやうである。月四・四、往四・四九等がその例證である) Abhidhammapadīpikā もその九三及び一〇九九語に Tathāgata を Satto としてゐる。この様に如來の語を衆生と解釋すると、初めて所謂十四置難が、當時の人々に取つて、又永久に人類に取つて普遍的な共通の問題であることが了解せられると思ふ。然し先きにも云ふ様にこの如來の語義は佛教の中で變遷し成長してゐるから、この如來死後存在の問題が佛如來の死後の問題、換言すれば無餘涅槃の問題に轉換されてゐる所もある。これは次に述べたいと思ふ。

それで第二に、佛如來の意味に用ひられてゐる所を云ふと、先に出した轉法輪經の前と中とに顯はれてゐるものがそれである。如來を友の語又は名に依つて呼ぶなどか、中道が如來に依つて悟られたとか云ふ如來は云ふ迄もなく、世尊の事である。後世の論部、及び大乘經典に非常の影響を與

へた。

緣起とは何ぞや、比丘等よ、如來世に出づると出でざるとに關せず、この緣起は常住、法位、法定なり

といふ文が、處々に佛出世不出世とか有佛無佛とか如來の語を佛の語に換へてあるのもこの理由からである。その他如來の十力 (A. X. 31. S. 12. 12) とか如來の五力 (A. V. 11. A. VI. 64) とか云ふ所は皆この佛如來で世尊の事である。然し乍らこの Tathagata が、かうして佛陀の換名になるか、證悟者を顯はすかは明了でない。それであるから如來の語には直ぐに説明を要する。比丘等よ、如來は應供者正等覺者なり〔轉法輪經〕とか、「如來は應供者、正等覺者、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛陀、世尊なり」といふ普通に曰はれる如來の十號とか、「優婆塞の信とは如來の菩提を信することなり」とか云ふのは、皆この不明了な如來の意義の説明であると云つては、餘りに言ひ過ぎであるかも知れないが、若し如來といふ語が初めから佛陀とか應供者とかいふ語の如く意義明了に證悟者を顯はすものならば、こういふ意味を限定し或は擴大する諸語は要せない筈である。一般に或る意義に於て有情といふ意味の語を採用して自己の特殊性を顯はされたものであるから、その説明として是等の諸文語があるものと考へねばならぬと思ふ。

扱てこの様にして、如來の語は世尊に依つて採用せられて——耆那教にも如來の語は Sutrakya-

na に顯はれてゐるが、至極稀れであつて、佛教に用ひられたものが後に耆那教に及ぼしたものと考へられる——世尊の特殊性を顯はす様になつたが、言語の一般性として、その結果、如來と云へば既に全く佛陀を意味する様に變化するに至つた。喩へば巴利雜阿含三、一一一頁以下に舍利弗が五蘊の二々に掛けて如來を見得るか云ひ「*Dittheva dhamme saccito tathato Tathāgato anupalabbhū-  
amāno* 現法に於ても眞に如實に如來は得られず」といふは佛陀としての如來、聖者としての如來を意味して居る。同じく雜阿含四、三七四頁以下に、波斯匿王がケーマー比丘に對して如來死後の存在問題を尋ねてゐるが、波斯匿の問ひの意味は聖者としての如來に關するか、又は衆生としての如來に關するか不明であるが、ケーマー比丘尼は明かに佛陀としての如來に就いて答辯してゐる。それは、如來は色行、受行、想行、行行、識行を離れたり云ふ語、及び海の水の廣大なるが故に量り得られざると同じく、如來は甚深なるが故に量り得られずと、捨置記に對して別の理由を與へてゐる點で知られるのである。普通こういう場合の捨置記に對しては、證悟の爲涅槃の爲に利益を齎らさないからといふ理由が附せられて居るに拘らず、茲では甚深にして量り得られざるが故にと云ふ理由が與へられて居るのである。巴利長阿含三・一二五頁以下の如來死後の存在問題も、同様に佛如來で解してある。こういう場合、佛鳴は龍樹が佛如來といふ熟字を用ひてゐる様に *Sabbatthu tathāgata* といふ熟字を以て如來を制限してゐる。その他巴利雜阿含三・一一八頁の *Tathāgato utt-*

anapuriso paramapuriso paramapatipto (如來は最上の人、最勝の人、最勝の得達に達せる人)とあるもの例である。

六

既に如來は佛陀を顯はすに至つた。次には、その必然の結果として、過去の諸佛及び心解脫の聖者に迄擴げて用ひらるゝ様にすゝんだ。佛陀の語が七佛通誡の偈に、*Buddhānān sāsanaṃ* と複數に用ひられて居ると同じく、如來の語も *Tathāga ānāṃ uppado vā anuppado āt* (S. II. p. 25, A. I. p. 266) と複數に用ひられてゐる。この複數の諸如來の語が、過去の諸佛を顯はすか、或は廣く心解脫の聖者を含んでゐるかは疑問であるが、この場合は恐らく前者であらうと思はれる。法句の二百五十四偈、二百七十六偈も、*Tathāgata* といふ複數を用ひてゐるが、これも諸佛を指すと見るが妥當と思ふ。

次に巴利增一阿含二・二四四—五頁の四種の臥の *Tathāgata-seyya* (*catutthajhānān upasam pajja viharati*) は阿羅漢と同義と見て差支なからう。又巴利雜阿含五・三二七—八頁の四種の住の中如來住を有學住と對せしめて、

*ye anuttarān y ogakkhemān pathayamānā viharati te ime pañcaviyāre paṭhāya viharanti*



ye arahanto Khināsavo vusitavanto ..... vimuttā, ine pañca nivarant pañā a

無上の安穩を望みつゝ住する所の人々はこれらの五蓋を捨てつゝ住し、漏盡にして、善き教養を有し、……解脱せる應供者は、これらの五蓋を捨て了りて……

とあるは如來を阿羅漢と同義に見るものにて、阿羅漢が師弟一味の證悟境に入れるものに名けたる名稱なるが故に、如來の語は心解脱の聖者に擴けられて用ひられてゐるのである。巴利中阿含二十二經蛇譬喻經の「比丘等よ、斯くの如き比丘（心解脱の比丘）を印陀羅も梵天のものも波闍波提のものも、これは如來所依の識なりと見ることは出来ない。何故なれば如來は現法に於ても知ることが出来ないからである」といふは猶一層適切に心解脱の聖者を如來と呼んでゐる例證である。

以上の記述に依つて、私は如來の語は先づ有情の意義を有し、これが佛陀に採用せられて、佛陀の特殊住を顯はし、次に過去の諸佛と一般に心解脱の聖者に適用せらるゝに至つたことを示し得たと思ふ。

## 七

最後に如來の定義であるが、巴利增一阿含二・二三―四頁には四義を挙げ、巴利長阿含三・一三五頁（漢譯長阿含十七（晨九・六二）には五義を舉げてゐるが、佛鳴はスマンガラ、并ラーシニー五九頁

以下に入義別義一義合計九義を擧げてゐる。煩はしいから龍樹の釋義と共に一括してその相互の關係を示して見やう。

Suma gata Viāsini の九義	長阿含の五義	増一阿含の四義
一、Tathā āgato 諸佛の如く六度を行して來る	* 漢譯長阿は (一、三、四)のみ を出せり	
二、Tathā gato (1) 諸佛の如く生れ乍ら七歩を行ける故に (2) 諸佛の如く煩惱を斷して行ける故に		
三、Tathā rakkhanaṃ āgato 諸法の如實相を智慧にて達せ る故(āgato = patto)		
四、Tathā dhamme yathāvato abhisambuddho 四諦十二因縁の如を證れる故に (gata = abhisa. nuddho)		
五、Tathā dassitāya 境を如實に知解せる故に、 (gata? = dassi)	(二)	(一)
六、Tathā veditāya 成道より涅槃迄如實に語り給ふ故に、 (āgata = āgata 語る)	(三)	(二)
七、Tathā karitāya 能行一救 (gata = pavatta)	(四)	(五)

八、Abhibhavana<sup>1</sup>thera 阿伽陀藥の一切の毒に

勝つが如く、一切の衆生に勝れ無等者なる故に

(Tathā = viya  
āgata = agada)

九、Tathā gito 四眞諦の知斷證修に如實に達せる故に

(gata = avagata  
patti, prapanna)

(五)

(四)

(一) 三世の諸法に於て時語者實語者義語者法語者律語者の故に

法蘊足論(秋四・七)はこの第六義を以て如來を解釋し、般若經(小品も小品も同じ、小品を出せ

ば摩訶般若十四(月四・五)には有佛無佛相性常住佛得如實相性故名爲如來とか菩薩摩訶薩得此如故名爲如來(月四・一二)とあり、この第三義第四義に近きものに依つて解釋するものである。智度論二十一(往二・四)には一、言無錯謬二如諸佛來至菩提中三如諸佛去至涅槃中の三義を擧げてゐるから、一は六に二は一に三は二に當てはまる譯である。智度論七二、(往四・六三)佛因此如故名爲如來如來者如實行來到佛法中、及び同論八五(往五・二三)得諸法如故說名如來と云ふは般若の得如故名如來の解釋の系統を引くものである。又同論二十四(往二・十八右)の如實道來故名爲如來は成實論一(藏二・五)第一義乘如實道來成正覺故曰如來に同じく、巴利系に見えない解釋である。成實論の

同處に第三義從得道夜(朝)至涅槃夜於其中間所說皆實と云ふは六に當り、其の下に實說實義應時と云ふは長阿含の(一)に當るのである。十住毘婆娑論一(暑八・五)にも數說擧げてあるが、分類すれば(一)至眞實中、(二)到實相中、(三)如去不還とする事が出來、(一)は一、(二)は三、(三)は二に當てはめ得るのである。この表を土臺にして、順次に多くの定義を生じ來つた變遷を知り得るのであるが、茲には總ての經論に互つての定義を引くことが出來なかつたから、今その問題に立ち入る資格はないのである。唯これらの定義が、佛教内に於ける如來の名稱の確立して後、漸次にその多含的な從つて曖昧な處を發展せしめ、明瞭にせんとした努力の然らしめた所であることを曰ふにとどめて置く。

茲に私に疑問として殘されてゐるものは、何故世尊がこの如來の語を採用なされたか、この語がいかなる徑路を取つて正覺者を顯はす語として世尊に採用せらるゝに至つたかが問題である。以上の研究に依つて、遂に私は世尊の御心持を的確に擣むことが出來なかつたのである。これは切に先輩の方々の御教示を得たいと思ふ。若し其處迄突込つて知り得るならば、世尊の自内證の光景もそれ丈け手近にはつきりと認めることが出來やうと思はれるのである。然し乍ら如來の語を採用なされた御心持ははつきり知り得ないが、この *Tathā* といふ語が、後世の佛教、大乘教を惹き起す一つの大きな原動力であつたことは容易に知り得られるのである。 *Tathā* は *sacca* と同義であり *Cattārimāni tathāni avitathāni anaññatathāni* (S. V. p. 430) 眞諦をもうひるを原理的に言ひ顯は

す語となり従つて Tathāgata とはその原理を體得した人の意味となり、既にその中に後に開發さるべき形而上學的原理を含蓄してゐたのである。それ故に後に般若經の中心原理となり、隨つて龍樹の形而上學の中樞である如、法性、實際といふ中心原理は、概括的に云ふ事が許されるならば、この如 (Tathāta) は四諦と四諦を體得した如來の如の系統を引き、法性 (Dhammatā) は有佛無佛に拘らず法住法位法性常住の十二因縁の系統を引き、實際 (Bhūta) は涅槃の系統を引いて、空といふ否定語に依つて開顯せられる實相の世界が如であり法性であり實際であると示されてゐるのであると思ふ。(完)